

## 第四節 学校生活と生徒の気質の変化

### 一 男女別生徒数および比率の推移

戦後の民主的な学校制度改革の眼目の一つが男女共学であった。長野県下では一九四八（昭和二三）年度より逐次男女共学が実施され、かつて旧制中学校であった高校では、翌一九四九（昭和二四）年度に長野北高校（現在の長野高校）と松本深志高校がまず男女共学となった。本校もその翌年度の一九四七（昭和二五）年度より男女共学となり、初めて女子生徒十三人が入学した。

全学年とも女子が在籍することになったのは一九五二（昭和二七）年度以降である。この年度の女子生徒数は全校生徒七百五十人のうち五十五人で、全体の七％程度に過ぎなかった。しかし、年度を追うにしたがって増加し、男女共学の開始から十年後の一九六〇（昭和三五）年度には、女子生徒の比率は早くも十％を超えた。その後も女子生徒の数は着実に増え、一九七六（昭和五一）年度には三十％を超え、一九八八（昭和六三）年度には、ついに四十％を超えるにいたった。平成に入ってからも四十％台で次第に増え、二〇一一（平成二三）年度には四十九・二％に達し、過去最高の比率となった。ただし、それ以降の最近十年間ほどは、四十％台半ばから後半で推移している。

こうした男女共学の導入にともなう女子生徒数の比率の増加は、戦後の民主的風潮とともに、本校の校風や生徒の気質に大きな影響を与えることとなった。旧制中学校時代からのいわゆる「バンカラ」な校風や気質は次第